私の隣で君は笑う

大神　林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の隣で君は笑う

【Ｎコード】
Ｎ７８２３Ｔ

【作者名】
大神　林檎

【あらすじ】
ここは能力を持つ者たちが集う大きな都市“ルヴォルカ”。
大国“ドゥルグン”の実に大半を占める都市である。
その都市にはさまざまな異能者いる。
あるものは能力者と名乗り、
あるものは魔術師と名乗り、
あるものは法術師と名乗り、

あるものは戦闘士と名乗り。

かつてここには科学者もいた。
しかし、彼らはその貪欲すぎる好奇心によって迫害された。

ここに一人の女がいた。
その女は科学者に実験体扱いされていたため、能力を嫌っていた。
しかし、女は優しすぎた。
その優しさゆえに、さまざまな問題に巻き込まれていく。

プロローグ

そこは、色んな文化が入り混じった都市だった。

あるものは能力者と名乗り
あるものは魔術師と名乗り
あるものは法術師と名乗り
あるものは戦闘士と名乗り

しかし、そこに科学者はいなかった。
科学ではもう上記のものは説明出来ず、迫害され根絶やしにされたのだ。

そこに一人の女がいた。
彼女は能力者と名乗った。
彼女の力の一つは、物質干渉（マターインタフィアランス）。
物質に直に干渉し、それを自在に操る能力を持つ。

しかし、女はこの力を嫌っていた。
この力のせいで彼女は実験体（モルモット）扱いされ、科学者にさんざんいじられてきたからだ。
だからこの力も嫌いだが、この力を馬鹿にする人も嫌いだった。
彼女は心優しい人だったのだ。

しかし、それでも世界は回っていく。

優しい彼女を中心に、世界は回る。
数々の物語をその足元にこぼしながら…。

優しい彼女は、それを丁寧に拾っていく。

プロローグ（後書き）

とりあえず始まりました。…始まってしまいました。
まずはがんばって進めたいと思います。

「普通に起こして」

「乃鴉(ノア)」

兄さんの声が聞こえる…でも少し寝かせて欲しい。

「乃鴉、起きなさい」

眠いんだから寝かせてよ、兄さん…。

「起きないと…」

起きないと？

「布団引っぺがして抱きついてハァハァするよ」

ガバッ

「やっと起きたか」

「…毎回毎回変な起こし方やめてっていってるよね」

跳ね起きたせいで布団がぐちゃぐちゃだ。

額に手をやって大きく溜息を漏らす。

「起きない乃鴉がいけない」

「普通に起こしてよ馬鹿兄さん」

「お兄ちゃんに向かって馬鹿とはなんだ」

私のベッドの縁に腰掛けている兄さんが拗ねた声を出して私に抗議する。

可愛くないし、お兄ちゃんってなに？私そんな風に兄さんを呼ばないんだけど。

「朝飯食べるだろ？」

「んー…うん、ありがと」

兄さんが立ったから私もベッドを降りて鏡の前に座る。引き出しから櫛取り出して髪をとかすのが朝の日課。うとうとと寝ぼけながら髪をとかしていると兄さんが私の後ろに座って私から櫛を取り上げた。

「いいよ、久しぶりに乃鴉の寝顔が見れたから」

そう言って丁寧に私の髪をとかす。一人でも出来るんだけど、兄さんはこれをするのが好きみたいだから放っておいてる。

三ヶ月に数回、一人暮らしの私を心配しているらしい兄さんは一日だけ私の家に泊まって朝起こしてくれる。夜になったら仕事があるから帰っちゃうんだけど、それまでは私にべったりとくっついてくる。朝食だって、私も料理できるのにこれだけは譲ってくれない。

「もう…夜ちゃんと寝てるの？」

「寝てるよ。乃鴉の寝顔を存分に見て癒されてからね」

「……兄さん気持ち悪い」

…これさえなければただの過保護な兄さんなのに。
顔も頭も良くてモテる兄さんはただのシスコンだ。私にはべったべたに甘いくせに、私の身の回りの男にはすごく厳しい。…本当に惜しい人だと、昔から思ってる。

ピンポーン

「あ、シン」

「なにっ！？」

しまった…つい口に出しちゃった。
案の定、私の髪を結い終わった兄さんは猛ダッシュで玄関へと向かう。

「シン、テメェ何しにきやがった！」

「ちょっ修一さん来てたんすか？！」

玄関前で朝っぱらからうるさい男どもだ…。私も玄関に向かい二人をたしなめる。

「二人とも声大きい。近所迷惑でしょ」

溜息をつきながら二人を注意すると

「ノア！お前なんで言ってくれなかったんだ！」

「あー…ごめん、普通に忘れてた」

「俺の可愛い乃鴉に向かってお前となんだお前とは！」

「兄さん、うるさい。黙ってて」

私は耳を塞いで兄さんを睨む。

少し長く、首にかかるくらいの黒髪に同じ黒い瞳を持つ背の高い私の兄さん。名前は佐倉修一（サクラ シュウイチ）。一流企業のＳＥ（システムエンジニア）をやっていて、機械類にはめっぽう強いが幼児の扱いがめっぽう弱い。

そんな兄さんに理不尽に怒鳴られているのが、私の幼馴染のシン・フォーラル。赤い髪をワックスでオールバックに纏め、瞳も髪に似合う赤い瞳。私と幼馴染だけあって私をよく理解してくれていると同時に兄さんに虐げられる確立がナンバーワン。

「とにかくシン！お前は帰れ！乃鴉のパジャマ姿が見れただけでもありがたいと思え！！」

「い、いや…別にどうでも…」

意味不明なことを叫ぶ兄さんを刺激しないように腰を低くしつつも反論するシン。一応兄さんとシンも幼馴染なんだけど。

私はもう呆れていいのか怒っていいのか分からず兄さんを見守ることにした。ごめん、シン。今の兄さんには関わりたくないんだよ。

「あ？乃鴉のパジャマ姿に何も感じないってか？お前は本当に男か？！」

「それももう見飽きてるからなんとも…っていうか修一さん、俺たち幼馴染だからもう男か女とか意識しないっすよ」

そりゃそうだよ、私たち幼馴染だもん。一緒にお風呂だって入った仲だよ。

「こんなに乃鴉が可愛いのにか？！じゃあお前は今乃鴉と一緒に寝てもなにもないというのか！？」

…前言撤回。関わりたくないけどこれ以上は兄さんのシスコンが悪化するだけだから止めたほうがいいかも。

「俺なんか乃鴉の寝顔見ただけで！」

「はい終了、本当に黙って。シンやっちゃって」

「ああ」

呆れ返ったシンは手の平を兄さんに向けた。その瞬間兄さんの体は全く動かなくなる。

「ちょっそれ反則だ！お前らズルイぞ！」

「兄さんがうるさいのが悪いの」

慌てた兄さんに構わず私も手の平を兄さんに向ける。

その瞬間に兄さんは消え、私の家の居間から「乃鴉―！シン―！」と怒鳴り声が聞こえてきた。

「シン、いつもごめんね」

「いや、慣れてっからいいよ」

シンはそう言って苦笑いをした。私も苦笑いをして、シンを家に招いた。

「普通に起こして」（後書き）

とりあえずおかしな兄と苦労性の幼馴染登場。
いつでもノアちゃんは冷静です。

「拗ねないの」

シンを我が家の朝食に招く。実はこれ、毎朝の日課になってるの。

「せっかく乃鴉と二人きりだと思ってたのに…」

今日の朝食当番の兄さんが可愛いエプロンをつけて台所に立っている。

ちなみに、あのエプロンは兄さんの持参品。しかも私が使ってるのと酷似している。

「乃鴉とおそろいー」なんて言いながら買っていた変態兄さんを覚えてる。

「兄さん、それ毎回言ってる。いい加減聞き飽きたんだけど」

「言わされるこっちの身にもなってほしいっす…」

私とシンは二人で兄さんの手伝いをしながら不平不満を言う。

「大体、何でシンなんぞが乃鴉と毎日ご飯一緒に食ってるんだよ。お兄ちゃんはそこが気に入らない！」

また始まった…。

私は溜息をついてもう何度目になるかわからない説明を始める。

「何回も言うけど、シンには毎日私のトレーニングの相手をしてもらってるの」

「そんなのお兄ちゃんが相手するって。なにもシンと二人でするこ

とないだろ」

「あのねぇ…これも毎回言ってるけど、一般人(ジェネラル)の兄さんに私の相手出来ないでしょ」

こう言うと、ピザトーストを運んできた兄さんは膨れっ面をして拗ねてしまった。

「そうっすよ、修一さんは危ないっす。特にこいつの力は…」

「なんだよ二人して！どーせ俺は何も出来ないさ。一般人(ジェネラル)さ」

手荒に置かれたピザトーストが一瞬跳ね上がって、少し机を汚した。もう…シンが来るといつもこうなんだから。片付けるこっちの身にもなってほしい。

「そうやって拗ねないの。私たちだって好きで上位(セルサス)って呼ばれてるわけじゃないんだからね」

机を拭いて、三人とも席につくのを見計らって飲み物を配る。

「「「いただきます」」」

三人で仲良く朝食をつついている間に私のことと、この都市のことを説明しようか。

私は大神(オオカミ)　乃鴉(ノア)。兄さんの妹で、今はこのアパートに一人暮らししてるの。兄さんと苗字が違うのは、両親のいない私たちを母さんのお姉さんに養子として引き取ってもらったの。でも私はこの苗字は両親がいたっていう最後の形見だから、使わせてもらってるの。兄

さんはその叔母さん夫婦の家に住んでて、わざわざ私の家に足を運んでくれている。

次は私が住んでるこの都市の説明だね。
この国は“ドゥルグン”といって、異能者（バリアントナンバ）がたくさん集まってくる大国。そして私たちが住んでるのは、その国の中でも大半を占める大都市“ルヴォルカ”。異能者（バリアントナンバ）が一番集まるのはこの都市と言われている。この国は他国者の出入りの激しい国だから商い業が盛んで、それがこの都市の観光スポットにもなっているらしい。まあ、その中でも端のほうである“ランディム”に住んでいるのだけど。

最後は異能者（バリアントナンバ）について。
異能者（バリアントナンバ）とは、その名のとおり普通の人間とは違った力を持つ人間のことを指すの。大きく四つのカテゴリに分けられていて、まず一つ目は人の思考に干渉したり、そこにある物質に干渉する異能者（バリアントナンバ）を能力者（ネイチャ・フリクション）と呼ぶ。次に、この次元の力ではない、異次元の力を使う異能者（バリアントナンバ）を魔術師（ウィザード）と呼ぶ。次に、その異次元に対抗すべく生まれた人の気を使う異能者（バリアントナンバ）を法術師（エントリティ・フォース）と呼ぶ。そして最後に自身の能力だけを最大限に活かし、どんな戦闘武具も扱う異能者（バリアントナンバ）を戦闘士（ウォーフェアー）と呼ぶの。
本当はここにもう一つのカテゴリがあるんだけど、それを今説明する必要がないから省くね。

あ、もう一つ説明しなきゃ。
その異能者（バリアントナンバ）の中でも、一人一つのカテゴリの力しか使えないの。まあ、違う力を使うなんて体も脳も持たないからね。けど、一つのカテゴリの中なら力を数種類使うことの出来る人たちがいる。ただ、中には何の力も使えず異能者（バリアントナンバ）でない人もいて、その人たちを一般人（ジェネラル）と呼ぶ。
次からは異能者（バリアントナンバ）でも力を何種類も持っている人の名称を紹介するね。
まず一つしか力を使えない人は下位（マージン）。二つの力を使える人を中位（メディアン）。

最後に、三つの力を使える人を上位（セルサス）と呼ぶの。基本的に同じカテゴリの中でも力を持てるのは三つまでとなっていて、四つの力を持つ人はいない。正確には見つかっていない、なんだけど。

私は異能者（バリアントナンバ）で、能力者（ネイチャ・フリクション）のカテゴリの上位（セルサス）なの。力の種類を簡単に言うと、一つ目は瞬間移動（テレポート）といって今いるところから違う場所へ一瞬で移動できる力。二つ目は異能無効（アンチ・サイ）といって、あらゆる異能者（バリアントナンバ）の力を打ち消す力。本来この力は他の力と共有して持つことは出来ないらしいんだけど、そこんとこは私にも分からない。最後の力は物質干渉（マターインタフィアランス）というんだけど、実はこの力まだ未発見の力らしくて説明がとてもしづらい。なんか、そこにある物質に触れ、その物質を自由に操る力、としか認識していない。

ついでにシンのことも説明しとこうか。

シンも私と同じで、能力者（ネイチャ・フリクション）の上位（セルサス）なの。使う力の説明も簡単にしときますか。一つ目は発火能力（パイロキネシス）といって何もないところから自由に火を出したり、それを操る力。二つ目は電化能力（ヴォルトキネシス）といって火と同じように何もないところから電気を出して操ったり、そこにある電気を自由に操る力。最後は念動（サイコキネシス）といって、そこにある物体を自由に動かしたり、操る力。

私の物質干渉（マターインタフィアランス）と似てるんだけど、シンの念動（サイコキネシス）は私の力と違って目に見える物体を操ることしか出来ないの。それも固体限定。私の物質干渉（マターインタフィアランス）は目に見えない空気や大気、細胞とかも自由に操れるの。ただ、ここまで細かいと疲れるからあんまり使わないけど。

私の兄さんは一般人（ジェネラル）。でも機械類に関してはその会社に右に出るの者はいないって言われるくらいに詳しいの。だから、私たち異能者（バリアントナンバ）じゃなくても、それに負けないくらいの知力を持ってる。

大体こんなもんかな。私たちは生まれたときからこんな力の中で暮らし、そのせいで力を悪用する人もたくさんいる。でも、そんな人たちばかりじゃないし、自分の身は自分で守るのがこの国のスローガンみたいなもんだから安全に暮らせる。

あ、二人ともピザトースト食べ終わってる。私も食べ終わったからシンと声を合わせて言う。

「「ごちそうさまでした」」

「おそまつさまでした」

この兄さんの言葉を合図に、いつも静かな朝食の時間は終わる。

「拗ねないの」（後書き）

少しややこしくなっちゃいましたかね。
とりあえずこの国とこの都市、能力についての簡単な説明です。
お兄さん、ちょっと不便だったかな…。

「お願いね」

「よし、お腹もいっぱいになったし運動しなきゃ」

片付け終わった私は伸びをしながら言う。ちなみにまだパジャマである。

…だってこれから汗かくのに着替えるの面倒くさいしね。

「乃鴉はどんな姿でも可愛いんだよ」

いまだにエプロン姿の兄さんが私に微笑んで言う。

「それ、女の子を敵に回す発言だよ兄さん」

私は遠まわしに太っててても、というニュアンス発言をした兄さんを軽く睨み、着替えるために部屋へと戻る。

今日の服は…いつもの服でいいか。さして考えもせずに即決した私は箪笥から服を取り出す。

「ノア」

私がまだ着替えていると、いきなりドアが開き、シンが私の部屋に入ってきた。

「っと悪い、まだ着替えてたか」

「うん、まあシンならいいよ」

シンに見られながらも私は普通に着替えを済ませた。この場面を一

度兄さんに見られ、「お前たちは男女としてのなにかが欠けてる！」なーんて言われたけど、シンも私の着替えを見てもなんとも思わないはずだし、私もシンになら別に見られても恥ずかしくないし。これが私たちの普通でもある。…兄さんがこれを見たらまた一瞬で発狂しそうだけど。

私はドアと少し開けて兄さんと

「兄さん、私たち行ってくるね」

「おー、留守番は任せとけ」

「お願いね。帰り何か買ってきてほしいものとかある？」

「そうだな…酒とつまみ買ってきてくれ」

「また飲むの？同じやつ？」

「滅多に会えない妹と晩酌くらいいいだろ？同じやつで頼む」

「分かった」

「それと、シン」

「なんですか」

「乃鴉を頼むぞ」

「はい。分かりました」

こんなやりとりをして、トレーニング場所へ移動する準備を始める。
持ち物は水とタオルと着替えとお菓子を鞄に詰めて…。

「またお菓子持ってくのか？」

「なによ、シンだってなんだかんだ言って食べてるでしょ」

苦笑いしているシンに言い返した私は鞄を肩にかけ準備ＯＫの合図をする。シンも同じように鞄を持って軽く頷いた。

「んじゃ、行くよ」

私は手の平を床に向け、心の中で使う力を思い浮かべる。
他の異能者（バリアントナンバ）は呪文（スペル）を口で唱えたりするらしいけど、能力者（ネイチャ・フリクション）は言わずに思い浮かべればその力が使える。まあ、口に出したほうが集中しやすかったりする人は口に出して言うらしい。

［瞬間移動（テレポート）］

その瞬間、私とシンの姿は、私の部屋から一瞬で消えた。

「お願いね」（後書き）

ノアちゃんとシンくん、やっと部屋からの脱出です。
ノアちゃんは最初のほうでも同じの使用してましたが、書かなかったのは説明を書きたかったからです。
ようは伏せてました。

「悪趣味だね」

私が瞬間移動（テレポート）で移動した場所は、町外れの廃工場の中。ここならいくら暴れても、近くに住宅や人通りが多いわけでもないから迷惑をかけない。

「到着」

「相変わらずお前のそれは便利だな」

「何言ってんの。それいったらシンの能力だって此処では使い勝手いいでしょ」

私たちは鞄を闘いに巻き込まないように廃工場の外に置き、また工場内に戻って準備運動を始める。

「まあな。それに今日は調子がいいから、勝つぞ」

フン、と鼻で笑い私を見下しように言うから

「そんなことを許す私だと思う？」

私は身長差的に下から睨み上げながらニヤリと笑ってやった。
そんな私を見て、シンも満足そうに、期待してるように笑い、近くにあった空き缶を蹴っ飛ばした。

カーン

空き缶が落ちるとき、これが私たちのトレーニング開始の合図。

二人とも刹那の間見つめあい、視線でお互いを牽制し合う。

…カンッ

空き缶が音を立てて転がった。

その瞬間、お互いが牽制し合っていたのを解き、即座に距離をとった。

私は手の平を下に向ける。［瞬間移動（テレポート）］

「おいおい、いきなり逃げんのかー？」

私はさらに距離をとって、工場内でも隅にある階段へと瞬間移動（テレポート）した。

私が逃げないと分かっていても、シンは私を挑発する。これもいつものことだ。

「誰に向かって言ってんの？」

私は笑って、その場所から近くにあった鉄パイプを瞬間移動（テレポート）で持ち上げて自分の手に引き寄せる。その引き寄せた物を、また瞬間移動（テレポート）でシンの頭上に送った。その重みで、シンの頭に鉄パイプが落ちるように。

「っと」

しかしその瞬間、シンは自分の周り全てに発火能力（パイロキネシス）を使って炎を呼び出し自分の体付近を囲み、落ちてきた鉄パイプを溶かしてしまう。

まあ、そうなることが分かってやったのだけれど。

シンが鉄パイプを溶かしている間に私はシンのそばに瞬間移動(テレポート)して自分の部屋から持ち込んだ銃を構える。
瞬間、ボッと音がしてシンは炎を解き、いきなり私に既に準備していたのだろう片手剣で切りかかってきた。少し予想外の反撃に一瞬反応が遅れたが、それでもすぐさま手に持つ拳銃を盾にする。

「油断大敵って言葉あるだろ」

「それはこっちの台詞。私が一丁しか扱えないとでも？」

私はもう一丁の拳銃を取り出し、シンの額につきつけようとしたが、もう片手の開いている手で防がれてしまった。

「知ってるぜ。お前がひとりで二丁の練習してたのをな」

「覗きなんて、悪趣味だね」

「見守ってるといって欲しいな」

力では、男のシンには敵わない。私はまた瞬間移動(テレポート)を使いシンの背後に逃げ、シンに手の平を向ける。

「じゃあ、ストーカーね」

［物質干渉(マターインタフィアランス)］

私はシンの周りの空気を減らし、真空状態に近い状態を作る。

「っか、はあ…」

事態をいち早く理解したシンは息を止め、この状況に対応する。私

はさらに、一丁の銃をシンに向け、躊躇い無く発射させた。

「悪趣味だね」（後書き）

やっと戦闘描写をかけました。
二人とも意外に容赦ないです。
ノアちゃんなんか普通に拳銃ぶっ放してます。
シンくん大丈夫かな？

「私の相手（パートナー）は」

「！！」

さすがに驚いたのか、シンは少し目を見開いて、片手剣を盾に銃を防ぐ。それも予想していた私は物質干渉（マターインタフィアランス）を解いてシンを自由にすると同時に、また近くにあった壁を物質干渉（マターインタフィアランス）で脆くして壊し、その一部を瞬間移動（テレポート）でシンが片手剣を持ってる手の上に落とす。

けれど、シンは真空状態から脱したばかりにも関わらず冷静に、電化能力（ヴォルトキネシス）で電気を呼び出し鉄筋が混じっている壁を細かく粉砕した。

「んー、さすがに手放してくれないか」

「けほっ…当たり前だ」

今度は俺の出番とばかりに、シンは片手剣をしまい、片手に発火能力（パイロキネシス）で炎を、もう片手に電化能力（ヴォルトキネシス）で電気を呼び起こした。

「物騒な組み合わせだね」

あれは私にぶつけてくるつもりかな？

私はいつでも動けるように銃も二丁とも構えておく。

「ここらじゃお前くらいにしか出せないさ」

シンはそう言って笑った。そしてその瞬間両手を合わせ、炎を電気を一体化にさせ、混ぜた。ゆっくりと手を開き、その混ざったモノを私に向けて撃ってきた。

これは…受け切れるかな？
私はさっき崩した壁にまた手を当てて、同じような壁の塊をシンの撃ってきたものに被せるように瞬間移動（テレポート）させる。しかし、思ったよりも炎と電気を融合したモノは早く、瞬間移動（テレポート）させた壁の塊が空振りに終わった。

「これはマズイかな…」

これは使いたくなかったんだけどな…しかたない。痛い思いをしたくないし、怪我もしたくないし。
［異能無効（アンチ・サイ）］
その場に留まりこの力を使った瞬間、炎と電気を融合させたモノが私にぶつかってきたが私は薄い膜に覆われ無傷に終わった。
この力は確かに全ての異能の力を打ち消すことが出来るけど、その分三つの点が不便でもある。まず一つ目は、他の力と同じように連続したり同列して使えないこと。二つ目は、使用するときはいいんだけど、これを解いてから次の力を使うまでにタイムロスが発生してしまうこと。三つ目は、この力を使うとその場をあまり動けない…だから使いたくなかったのに。

私はすぐさまこの力を解くが、シンはいつの間にか私の背後にいて、その手にもつ片手剣を私の首元に突きつけた。

「…勝負あり」

そう言って嬉しそうに片手剣をしまうシン。…に、腹が立ったから、私はシンの上に瞬間移動（テレポート）をして、重力に従って落ちる私の下敷きにしてやった。
その時なんか「ぐぁっ？！」て変な声が聞こえたけど気にしない。

「お、お前な…」

「何よ。嬉しそうに油断してるシンが悪いの」

「んな理不尽な…」

そう言いながらも、シンは避けられたはずの下敷き役を回避しなかった。

なんだかんだ言って私のことを大事にしてくれているのは知っている。だからわざと下敷きにしたのだけど。

「疲れたー」

「それならどいてくれ。俺も疲れてんだよ」

「仕方ないな。っと」

私はシンから降りて、手を差し伸べてあげる。その手を取ってシンは立ち上がり、何故かいきなり私をお姫様抱っこした。

「おっと…いきなりなんの冗談なの？」

「強がるな。お前、俺の剣を受けた時足捻っただろ」

…バレちゃった。確かに私は一度シンの片手剣を銃で受け止めた時、少し体重移動を間違え足を捻っていた。バレないようにすぐに離れたし、接近戦を避けるためにシンには近づかないようにしてたのにな。もしかして、私が怪我してるの知ってたからなおさら下敷き役を回避しなかったのかな。

「やっぱりストーカー？」

「それ以上言ったらこのまま落とすからな」

「ごめんなさい」

シンが私を落とさないと分かっていたけど、心配してくれたのに茶化してしまったので素直に謝る。シンは私をお姫様抱っこしたまま工場の外にいき、近くにあったちょうどいい岩場に乗せてくれた。しかも私の鞄の中から湿布を取り出して貼ってくれた。

「そんなに強く捻ったわけじゃないみたいだな」

「うん、ちょっと体重移動をしくじっただけ」

シンは私の足元にかがみ、怪我を診てくれた。でもそんなに酷くないし、湿布貼ってちょっと休めばすぐに痛みはひく。

こんな怪我はいつものことだし、これでもシンとトレーニングして怪我は少なくなったほうなの。このトレーニングを始めたころは、シンが力の加減を知らないからあの工場を何回も破壊しかけた。今ではそんなことがないものの、やっぱり男と女の体力の差も関係しているのか中々シンには勝てない。それでも時々はシンを出し抜いて勝つときはあるんだけど。

「お菓子食べよう？あと飲み物も」

「はいはい」

シンは呆れたように、でも安心したように鞄を私に渡した。

こうして朝のトレーニングは終わり、いつものようにお菓子をつまみながら飲み物で水分補給をする。ちなみに、私はこの時間が好きだったりする。なんか、落ち着くんだよね。昔からシンとは一緒に遊んだ後はこうやってお菓子を食べてた。

「ノア」

「なーに？」

「今日の夜もだけどさ、明日もよろしくな」

そう優しく笑うシンに、私も今までの感謝を込めて精一杯の笑顔を込めて言った。

「うん。私の相手（パートナー）はシンだけだよ」

「私の相手（パートナー）は」（後書き）

ノアちゃんとシンくんはとても仲良し。
喧嘩もほとんどしません。
ただ、シンくんがノアちゃんに恋をしないのか…。
それは作者にもわかりません。
でもクルクル動き回ってくれる二人はこの関係が一番いいでしょう。

※最初の後書きで記載するのを忘れてたんですけど、
本文中の「力を解く」というのは「力を解除する」と捉えて下さい。
ただ、こちらのほうが作者が納得するだけなので。

「恋人」

私たちはお菓子をつまんで飲み物を飲んで、しばらく至福の時を過ごした。

「ノア、そろそろ行くぞ」

「あ、そっか。兄さんに買い物頼まれてたんだっけ」

私は岩場から降り、鞄を肩にかけた。その間にシンも準備は終わったようで、私を待ってくれていた。

「よし、行こうか」

私はシンに近寄り、手の平を下に向けた。

［瞬間移動（テレポート）］

私たちはそのまま都市の中心部へと向かった。

場所は変わり、私たちは一瞬でとても鮮やかで賑やかな大都市へと到着した。

「着いたよ」

やっぱりこの力は便利だね。だってあの廃工場からここまで行こうと思ったら車でも最低半日はかかるから。

「相変わらず賑やかだな」

私たちは歩きながら、くだらないことを話す。

「賑やかじゃなければここはもう終わりだよ」

「それもそうか」

ここは大都市“ルヴォルカ”の中でも特に商い業が繁盛している中心部“シュバイ”。
小物や雑貨から、使役やペットなどさまざまなものを販売している。
中には怪しいものを売ってる店も見かけるけど。
今日も色んなお店があって、人がとても多い。露店やなんかもあり、とても混雑しているみたい。

「お酒お酒…あった」

「修一さん何飲むんだっけ？」

「焼酎ってやつ。いつもは日本酒っていうもっと強いのを飲むから、今回は私に合わせてくれたのかな？だから、シン」

私はお酒を売ってる露店に行き、お酒を吟味しながら隣にいるシンに呼びかけた。

「付き合ってね」

「…え」

「え、じゃないよ。だから付き合ってって言ってるの。話聞いてた？」

話の分かっていないシンを、私はお酒をえらんでいるから、かがん

だまま見上げながら首を傾げた。

「いや、聞いてた。けど、話の主語が見当たらねーんだけど」

何故か私と目も合わせようともせずに言うシンを不思議がりながらも、またお酒吟味に戻る。

「決まってるでしょ。今日は兄さん私たちを寝かせないと思うよ」

「ああ…やっぱりか」

額に手を当てて大きくため息をつくシン。そのため息には激しく私も同感する。

手ごろな値段でいいものがあったからそれを買った。そしたらお店のおじさんが「お嬢さんたちカップルかい？」なんて聞くから私は笑って誤魔化したら、お揃いのネックレスをくれた。二つとも真ん中に赤い石が埋め込まれており、それと同時に何かの力も埋め込まれているものだった。おじさんにこの力を聞くと、占いを専門としている魔術師（ウィザード）が恋人のために作ったものだという。

「でも、こんな高そうなのいいの？私気に入ったからお金払うよ？」

「いいさいいさ。お嬢さんたちがとってもお似合いだから儂が渡したかったんじゃ」

おじさんはそう言って優しく笑ってくれた。せっかくだから、この石はもらっておこう。

おじさんにその埋め込まれてる力は何かと聞くと、

「なんだっけな…確か二人が離れててもお互いの位置が分かるとか

なんとか…」

「へぇ、とっても便利な力だね。ありがとう」

私は嬉しかったから、笑ってお礼を言った。買い物が終わって帰る私たちをおじさんも笑って手を振ってくれた。

ふと隣をみると、シンが複雑そうな顔でネックレスを見ていた。

「どうしたの？」

「いや…」

聞いても歯切れが悪く、答えてくれないシンからネックレスをひったくり目の前に立った。

「頭」

「は？」

「頭下げて」

言われた通りシンは私にお辞儀をするように頭を下げた。その下がった首に、今さっきひったくったネックレスをかけてあげた。

「？！」

「何よ。不満でもあるの？」

頭を上げ、とても驚いたようなシンに私も自分のネックレスを首にかける。その瞬間、何か力が私に纏わりつくのを感じた。

「お前…いいのか？」

「何が？」

んー…これもしかして一度つけると外れないタイプ？
そう思って試しに外そうとしてみたが、案の定どんなに力を込めても外れない。しかもこのネックレス自体に異能無効（アンチ・サイ）がかかってるから私の瞬間移動（テレポート）も物質干渉（マターインタフィアランス）も使えない。
魔術師（ウィザート）と能力者（ネイチャ・フリクション）の共同作製のものだろうか。
まあ、シンとはぐれた時に役立つだろうからこのままでもいいか。

「これ、恋人同士がつけるもんなんだろ」

珍しく困ったような声色に私は思考を止め、シンを見る。困っているのがとても分かりやすい表情で私を見ていた。しかし、私はその言葉の真意が分からず聞いた。

「それがどうしたの？」

「俺たち別に恋人ってわけじゃないだろ。幼馴染であっても」

なんだ、そんなこと。

「別にいいでしょ」

「お前は気にしないのか？」

「あのおじさんは確かに恋人のために作ったとは言ってたけど、恋人以外の人が使っちゃいけないとは言ってなかった。それに私はシ

ンが恋人ってことを肯定したわけじゃない」

「それは…」

「まだ分からないの？」

私はため息をついてシンの目を正面から見て言った。

「言ったでしょ。私の相手（パートナー）はシンだけなの。文句ある？」

手を腰に当てて、偉そうに言う私にシンは一瞬唖然としていたけど、すぐに口に手を当てて顔を真っ赤にし、目を逸らしながらこう言った。

「…文句なんかあるわけないだろ」

「恋人」（後書き）

ノアちゃん、天然にもほどがあります。
シンくんはこれでも普通の人間なので、戸惑うのは当たり前です。
フラグがいっぱい立ってるのにも関わらず、それに触れない。
どころか、純粋過ぎること言ってシンくんを困らせます。
まあ、男としてこれはどうなんでしょうね。
喜んでいいのか、複雑なんだと思うますよ、シンくんは。

おじさんも変なところで気が利くので、思わずフラグを書いてしまいました。
でもそう簡単にノアちゃんは釣れませんでしたけど。
いつもシスコンお兄さんと幼馴染くんがいたせいで、恋愛に鈍感のノアちゃん。
というか鈍すぎるノアちゃん。

恋愛…させるのは無理かな…。

「やり過ぎ」

「ならよし」

私は笑ってシンの前を歩く。その後ろを「こいつ絶対分かってない…」とかぶつぶつ言いながらついてくるシン。

せっかく大都市にいるのだからと少し二人で歩いていると、前の方で喧嘩らしき騒ぎが聞こえた。

「ねえシン、喧嘩っぽいよ」

「行くなよ」

行きたかったのだが、即座に釘を打たれてしまい私は思わず唸った。

しかし、よくよく聞いてみると女の人と男の人の喧嘩らしい。

「ねえ」

「危ないだろ」

「女のひとが喧嘩してるんだよ。助けてあげようよ」

「どんな理由か分からないのにか？」

それは確かにそうだけど…。それでも気になった私はシンの手を掴んで喧嘩の中心部へと足を進める。

「おい！」

「もし女の人が一般人(ジェネラル)で、男の人が異能者(バリアントナンバ)だったら？それでもシンは何もないかもしれないって言えるの？」

私はまだ文句を言いたそうなシンに、正論を言って黙らせた。もし私が言ってることが正しい場合、女の人は何も出来ずに男の人にいいようにされる場合が多い。

だから物質干渉(マターインタフィアランス)を使い、私たちは空気の上に立って少し上から喧嘩を覗いてみた。喧嘩をしていたのは女の人二人と男の人が一人だった。けど、喧嘩の原因がまだ分からないからしかたなく喧騒に耳を傾け大人しくする。

「ふざけないで下さいな。私たちはあなたのような下衆に触られたくありませんわ」

「なんだと？！可愛いからって調子乗るんじゃねぇぞ！！」

「調子を乗ってるのはどちらですなんですの？私の可愛い可愛い親友にその汚らしい手をかけようとしてた分際で」

「ねえ、もういいってば～…人がこんなに集まってきちゃってるよ」

背の高い女の人が、もう一人の女の人の盾になりながら相手の男の人に怒っていた。今にも噛み付きそうな勢いだ。これは多分、小さい女の人に男の人がナンパなにかで声をかけて、背の高い女の人が怒った…ってことかな？それにしては怒り方が半端ないような…。

「ほら見ろ。どうせロクなことじゃねーと思ったんだよ」

シンはさっきとはまた違う意味で大きくため息をついて言った。いや、でもなんか様子がおかしいんだよ。

「男の人…一般人(ジェネラル)だと思う」

「それがどうした。男が一般人(ジェネラル)で女が二人なら逃げ切れないこともないだろ」

そうじゃなくて…あー、もう！シンの分からず屋！

思わずシンの首を絞めた。また「ぐぇっ」っていう変な声が聞こえたけど気にしない。

「今さら謝ったって許してやらねえからな！」

男の人はそう叫ぶと、近くにあった水の入ってる樽を持ち上げ、あろうことか女の人に投げやがった。

私はとっさに手の平を樽に向け瞬間移動(テレポート)を使い、樽を男の人の真上に落としてやった。樽は男の人に直撃し、いい音を立てて転がった。

男の人は何がなんだか分からない様子で膝をつきながら頭を抱え、辺りをキョロキョロと見渡していた。

「ノア…」

ついやってしまった行為を、シンは非難がましい目で見てきた。

「だってムカついたんだもん」

私はその目を気にせず、喧嘩の末を見届けようとした。のだけれど…。

「…この下衆が。今のは私たちに向かって投げましたわね？」

背の高い女の人が低く呟いたかと思うと、手の平を男の人に向けた。もしかして、異能者(バリアントナンバ)なんじゃ…。そう思って見ていると、急に男の人が苦しみだした。周りのギャラリーにも動揺が走る中、男の人は転げまわりながら何かを叫びながら、頭を抱えて苦しそうにしている。

「あれは止めなくていいのか？」

いつの間にか私と同じように喧嘩を覗きこんでいたシンが言った。やっぱりあれは異能者(バリアントナンバ)の力。そしてその力は多分…。

「いや、行って来るよ」

私はシンだけを地上に降ろし、物質干渉(マターインタフィアランス)を使いギャラリーの頭の上を早歩きで通り抜け、背の高い女の人と男の人の近くに着地した。そのまま力を使っている女の人に素早く近寄り、その手の平に私の手の平を重ねて異能無効(アンチ・サイ)を使った。

「！！」

背の高い女の人は驚き、男の人はもう苦しまなかった。「ひぃぃぃぃ」と情けない叫び声だけを残し、逃げて行った。

背の高い女の人は不満そうに私を見て、それから手を降ろした。

「何故邪魔をしたんですの？」

「一般人(ジェネラル)にあれはやり過ぎだよ」

「余計なお世話ですわ。私には理由があってやったことなのですから」

背の高い女の人がそう言い切った瞬間、後ろにいた小さい女の人が顔を出した。

「あの、ありがとうございます～」

改めて見るとやはり、女の人二人の身長差は激しくかった。

「やり過ぎ」（後書き）

やっとノアちゃん達以外の人物登場です。
そのうちの一人は初っ端からひどいことしてます。
友達を大切にするタイプなんでしょうが、怖いですね。
ノアちゃんはよく動いてくれるのですがシンくんはあまり動いてくれません。
まあ、もともとノアちゃんのストッパー要員としての立場があるんですが。

それにしてもノアちゃんはとても好奇心旺盛で正義感が強いようです。
作者も初めて知りました。

「湧かさないで」

小さい女の人が私たちにお礼をいってすぐ。
背の高い女の人…もう言い方が面倒くさいから女の人Aは小さい女の人、Bにいきなり抱きついた。

「大丈夫でしたの?!やはり私と一緒に行動させるべきでしたわ…」

「うん、大丈夫だよ〜。だからそこの人にお礼を言おう?」

さっきの冷たい空気は微塵にも感じられない、女の人Aのあまりの豹変振りに私は思わず親近感を覚えた。ああ…きっと兄さんと同じ類の人だ。直感でこう感じた。
女の人Bは抱きつかれながらも私を指差し、樽のことでお礼を言いたいと言い出した。

「そうですわね。一応助けてくれたようですし、お礼を言いますわ。ありがとうございました」

「いえいえ、女子供に手を挙げる男には当然のことをしたまでだから」

そう笑って答えると、女の人Aは目をすうっと細めて私と見た。

「…それなら、何故さっき私の邪魔を?」

「んー、だって一般人(ジェネラル)の男一人にあれはやり過ぎかなって。あの力、精神攻撃の類のものでしょ?」

「よくお分かりで。私は幽体操作(アストラル・コントロール)を使って精神的にあの男を苦しめましたのよ」

幽体操作(アストラル・コントロール)…幽霊を操ったり、生きてる人の霊体に触れ、内部から侵食し最悪の場合発狂死させてしまうことも出来る力。本当に恐ろしいことしてたんだね。その力が私に向かなくてよかった。

私はつい笑顔が引きつってしまう。いつの間にかギャラリーは解散していて、私たちの周りには誰も好奇の目を向ける人がいなくなった。

「ノア、大丈夫か」

シンが私に近づいてきた瞬間、女の人Aは殺気を丸出しにし始めた。

「ちょっと〜、助けてくれた人の知人さんに迷惑かけちゃ駄目だよ？」

それに気づいた女の人Bが急いで女の人Aを宥める。シンは何か嫌な予感でもしたのか、それ以上近寄ってくることはなかった。うん、いい判断だよシン。

「失礼しましたわ…私男っていうだけでとても殺意が湧くものですから」

「そんなもん湧かさないで下さい」

つい即座にツッコんでしまった。シンが殺されるかもしれないと思ったら言わずにいれなかった。

でも納得がいった。だからさっきの男の人にも異様に怒ってたんだし、力も使ったんだ。…本当にこの人怖いな。兄さんと同じ類の人

かと思ったんだけど、違ったかな？

「その代わり、女と子供にはとても愛情を込めて接しますわ」

ああ、間違ってなかった。

私は安心して頷くと、女の人Aは女の人Bから離れ、私に近づいてきた。…あまりいい予感はしないんだけど。

女の人Aは私の顎を持ち、上に上げた。必然的に女の人Aと目が合うとAは嬉しそうに私に抱きついた。

「なに？！」

「さっきはムカついててよく見てなかったけどあなたとっても可愛いのね！」

おっと…さっきの「女子供には優しい」宣言は女子供には歪んだ優しさを向けると言う宣言だったのか。横目でシンを見ていると、固まっていて、どうしたらいいのか分からずキョロキョロしていた。

いや、助けろよ。

「もう、月影（ゲッエイ）。その人たち困ってるよ～」

「あら、そうね。自己紹介すらまだだったわ」

女の人Aは私から離れて軽く咳払いをして自己紹介を始めた。

「お初にお目にかかります。私の名前は月影（ゲッエイ）。能力者（ネイチャ・フリク・シェルザス）の上位ですの」

唖然としている私たちに、次は女の人Bが自己紹介を始めた。

「わたしは月影の友人の桜華(オウカ)です〜。わたしも月影と同じように能(ネイチャ・フリクシセルサス)力者の上位です〜」

…こりゃまた、濃い人たちが集まったな。

「湧かさないで」（後書き）

今回は少し短めです。
次で長く能力のこととかの説明も入るので。

ちなみに、上位はそうそうなれるものじゃないです。
ノアちゃんが言った濃い、とはこのことだと思います。
月影にいたっては違う意味も含まれそうですが。

「可愛い女の子」

「ついでに力のご紹介もしておきますわ。一つ目はさきほど言った通り幽体操作（アストラル・コントロール）。残りは超感覚（E・S・P）と治癒能力（ヒーリング）ですの」

超感覚（E・S・P）。それはふとした瞬間に予知夢を見たり、少し先の未来を垣間見ることが出来る力。治癒能力（ヒーリング）は心と体の異常を治すことが出来る力。どちらとも、この二つの力の持ち主は非常に少ないと言われている。

そんな人が目の前にいる兄さんと同じ類の人なんて…。私はちょっと複雑な気持ちになった。

「わたしの力は精神接触（テレパス）、動物精神接触（アニマルトーキング）、風力操作（エアロキネシス）です～」

これもまた珍しい。

精神接触（テレパス）は口や文字で相手に伝えなくても、ダイレクトに脳内同士で会話が出来る便利な力だ。この力は珍しくないんだけど、動物精神接触（アニマルトーキング）は珍しい。人以外の動物と、脳内同士で会話が出来る力なんだけど、今動物はあんまり多くないし、その動物も人に対して警戒心を持ってるものが多いからこの力の習得は難しいの。きっと桜華は心優しい人なんだね。

最後の風力操作（エアロキネシス）はシンの発火能力（パイロキネシス）や電化能力（ヴォルトキネシス）と同じような系統の力。風を自由に呼び出したりそれを操る力なの。基本これはあまり攻撃には向かないけど。

せっかく月影と桜華が自己紹介してくれたんだし、友達が増える機会かもしれないから私たちも同じように自己紹介を始める。そのためにシンに近寄ってもきてらったら月影がものすごく嫌そうな顔をしていたけど。

「私は大神乃鴉。そちらさんと同じように能力者(ネイチャ・フリク)で上位(セルサス)だよ」

「俺はノアの幼馴染のシン・フォーラル。ノアと同じく能力者(ネイチャ・フリク)の上位(セルサス)だ」

「上位(セルサス)？」

二人して一気に自己紹介をしたら、月影が何故か私を見て訝しげに首を傾げた。

「うん、そうだよ？」

「でもあなた、異能無効(アンチ・サイ)を使いましたわよね？」

あー…そっか。前の時に言ったように、異能無効(アンチ・サイ)は他の力と一緒に持つことは普通出来ないの。だから普通この力を持つ人は必然的に下位(マージン)になるんだけど、私はなんと言ったらいいか分からないので、簡単に説明した。

「私もよく分かんないんだけど、これ含め他二つの力も使えるの。ただ、異能無効(アンチ・サイ)は他の二つと同列で使えるわけじゃないから、これを使うと一般人(ジェネラル)みたいに無防備になっちゃうからあまり使わないけど」

「他の力は何を持っていますの？」

「瞬間移動(テレポート)と物質干渉(マターインタフィアランス)」

「マター…どんな力なんですか～？」

「私も知りませんわね」
今度は桜華が会話に混ざってきた。これも説明が面倒な力なんだよな…。実際に見てもらったほうが早い。
「シン、こっちきて。あの空き缶を念動(サイコキネシス)で浮かせて」
「分かった」
シンは頷いて、近くにあった空き缶にお酒を持ってないほうの手の平を向け、少しだけ浮かした。
「念動(サイコキネシス)ですわね…しかしそれとどういった関係が？」
「んー…知ってるとは思うけど、念動(サイコキネシス)は目で見える固体しか動かせないでしょ？」
「はい」
「ええ」
桜華と月影が答えた。私はそれを見て、説明の続きをするために手の平をシンが浮かしている空き缶へと向けて力を使った。
「物質干渉(マターインタフィアランス)」
その瞬間、
ベコベコッ
と、嫌な音がして空き缶が原型もなく潰された。その光景を見た二

人は唖然としていて、私はその空き缶を瞬間移動(テレポート)でこの手に収め、説明を続けた。

「念動(サイコキネシス)は目に見える固体しか動かせない。でも、私の物質干渉(マターインタフィアランス)はそれに加え目では見えない空気や大気、細胞の一つ一つまで操作出来るの。今は空き缶の周りの空気をなくして、真空状態を作ったから空き缶が潰れたの」

私は手に持っている無残な空き缶を二人に見せた。桜華は「すごい～！」ととても感動していたが私は桜華に敬語はやめてねと言い、月影は「そんなことが…」と唖然と呟いていた。

「二人が知らないのもしかたないよ。この力はまだ私しか持ってない未発見の力らしいから」

「へえ…でもそれ便利だね～。空気が操れるなら空だって歩けるでしょ？」

「そんなに便利なものでもないような気がしますわ。念動(サイコキネシス)ですら結構の集中力が必要ですから、その力なんてもっと疲れるのでは？」

「うん、そうなんだよね。だからそこまで細かいものは操作しないよ」

私は苦笑いをした。月影は細かいところまでよく気がつく人みたい。ついでに隣にいるシンの力も二人に紹介をする。

「シンの力は念動(サイコキネシス)と発火能力(パイロキネシス)と電化能力(ヴォルトキネシス)だよ」

「基本外傷的攻撃ばかりですわね」

月影はため息をついてシンをジロジロと見た。精神攻撃を得意とする月影から見れば、外傷攻撃は受け付けないものなのだろうか。

「ノア、早く帰ろうぜ。修一さんが待ってるだろ」

「あ、そっか。そうだ、二人とも私の家にこない？」

私が月影と桜華を誘うと、シンを含めた三人が驚いた顔をしていた。

「いいの～？」

「うん、せっかく知り合ったのも何かの縁だし、どうかな？」

「私たちは構いませんけど…」

月影と桜華は顔を見合わせ悩んでるみたいだ。

今日は遅くなっちゃったな…お昼なんかとっくに過ぎてるのにご飯食べられなかった。まあ、この問題に首突っ込んだのは私だけど兄さん待たせすぎたかも。これだと今からご飯の用意したら夕方になっちゃうから、晩酌を含めるともう夜ご飯になっちゃう。お腹空いたなあ…。

私が少し落ち込んだいる間に、シンは私の耳にこっそりと話しかけてきた。

「いいのかよ。そんな勝手なこと言って」

「大丈夫だよ、兄さんは可愛い女の子には弱いはずだから。それともシンが嫌なの？」

「俺はいい。理不尽なことがなければ」

真剣な顔で切実に言うシン。でもそれは…

「兄さんがいる限りそれは無理な願いじゃないかな」

「可愛い女の子」（後書き）

ここで月影と桜華の能力登場です。
二人ともわりと攻撃に向いてないものを持っていますね。
そしてシンくんはどこまでも苦労人のようです。
それにしても、ノアちゃんは人を信用し過ぎですね。
相手が男だった場合はどうなってたことでしょう。
まあ、その場合はシンくんが許さないでしょうね、きっと。

※月影の能力の超感覚（E．S．P）はそのまま「イーエスピー」と呼んでください。
確かこれが正式名称…だったはずです。

「間違い？」

シンの切実な願いを、複雑な表情で否定した私は、シンの手をとって月影と桜華のそばに行った。二人とも嬉しそうに微笑みながら、私たちを見ていた。

「ぜひともお呼ばれされますわ」

「お願いします～」

その返事に、私も嬉しくてシンの手を離して二人の手をとった。

「あっ」

が、その嬉しさですっかり忘れていることがあった。…お酒は買ったけど、おつまみを買ってない。お酒を買った後、すぐに月影と桜華の喧嘩を見てたから、すっかり忘れてた。

瞬間移動（テレポート）を使ってさっきの賑やかなとこに行けばいいんだけど今日は朝から力を惜しみなく使ってたからもうさすがに疲れてきた。集中力が持たないよ。

二人の手を持ちながら面倒くさいなー、なんて唸っていると、シンが私を呼んだ。

「ノア」

「なに？私今考え事してるけど」

「お前が何考えてるかなんて分かってる。これだろ？」

「ふぇ？」

おつまみどこで買おうかなんて考えたから変な声を出してしまった。少し恥ずかしかったけど、シンを見るとお酒が入ってる袋の中身を見せられた。中にはイカやらタコやらスライスなんとかのおつまみがぎっしり入っていた。

「ナイスだよシン！瞬間移動（テレポート）も楽じゃないから助かった！」

私は月影と桜華の手を離し、シンに飛びつくように抱きついた。抱きつかれた私より背の高いシンは、お酒をゆらさないようにしながら自分の胸元にある私の頭を優しく撫でてくれた。シンの体は筋肉は多いけど、脂肪がないわけじゃないから抱き心地がいい。昔からよく抱きついてたなー。

「…一つお聞きしてもよろしいですの？」

シンの抱き心地に満足していると、月影に声をかけられた。私はシンに抱きついたまま顔だけをうしろに向けた。

「なにー？」

「お二人は恋仲という関係ですの？」

「んぶっ？！」

手の甲を顎に当て、こちらをじっと見ながら真剣そうな顔で、そう聞いてきた。しかも月影の隣にいる桜華は何故か恥ずかしそうに、でも興味深そうに挙動不審に私たちを見ていた。その瞬間、シンが横を向いて吹いた。そしてむせ出したので、私は名残惜しいがシン

から離れて背中をさすってあげながら月影に苦笑いで答えた。
「違う違う、さっきシンも言ってたけど私たち幼馴染なの」
さっきのおじさんといい、私たちってそんなに仲良く見えるのかな？
「それにしても、少し戯れ過ぎのような気がしますわ」
戯れ…？ああ、くっつき過ぎってことか。
「え？私たちは昔からこんな風だよ？」
「じゃあとっても仲良しなんだね～」
桜華は楽しそうに笑っていたが、未だに月影はじとっとした目をしている。せっかくの美人が勿体無いよ。
「…それじゃあ、フォーラルさんとは間違いは起きてないんですのね？」
「ちょ、直球過ぎるよ月影～」
月影の言葉に、桜華は真っ赤になって慌てながらさっきよりも挙動不審になっている。それでも私の答えが気になるのか、ちらちらと桜華から視線を感じる。
間違い？何か間違ったことでもしたっけ？
私は未だにむせているシンの背中をさすりながら、月影の言葉が分からず首を傾げた。
「間違い？抱きついちゃいけないってこと？」

「よかったですの、その様子なら何も無さそうですわね」

「そっか～」

私の質問に、月影は何故か安心したように胸に手を置き、桜華は残念そうに苦笑いしていた。…結局答えは？あの質問は何だったの？頭にハテナがいっぱい浮かんだ状態で首を傾げたままでいると、むせ終わったシンが慌てて私の前に出て、必死に二人と話し始めた。

「月影、お願いだからもう何も言わないでくれ。それと、俺のことはシンで構わない」

「分かりましたわ。しかしそうは言いますけど、あんなに親密な仲でどうしてああまで潔癖でいられますの？」

月影とシンがまた私にはよく分からない話題で話だした。桜華に目線を送ると、何故か苦笑いされた。なんだか、桜華は話を分かっているみたいだから、一人話の分からない私は置いてけぼりにされたというわけか。

それでもなお続く、よく分からない会話。

「それは…俺と、こいつの兄とであんまりそういうことには関わらせてこなかったんだよ。まあ、その結果がこれなんだけどな…」

「ということは、間違いよりもそれ以前のことも分かっていないということですの？」

「多分、だけどな」

「なんていう過保護っぷり…呆れを通り越して関心しますわ」

「乃鴉ちゃんって全部がまだなんだね～」

「ああ。だから普通の知識は半端ないんだが、そっち面では疎過ぎるくらいなんだ。だからああ言われても多分何も分かってない」

「…そのままにして置くんですの？」

「今のあいつには何もかも遅すぎるから早すぎるんだよ。無意味な刺激をして悩ませたくないだけだ」

「月影、もう少し様子を見てみようよ～」

「俺からも頼む」

「しかたありませんわね…その代わり、シンがきっちり乃鴉を守りなさい」

「ああ」

なんか、一段落着いたみたい。シンがとても疲れたような顔をしているのは気のせいだろうか？月影と桜華は二人してまだコソコソと話してるし。

なんか、やっぱり置いてけぼりってすごく寂しい。ましてや、それにシンまで加わるなんて滅多に無いから、このやり場の無いモヤモヤをぶつけるべく、シンの膝を、うしろから思いっきり蹴ってやった。その時、「どわっ？！」なんて変な声が聞こえてきたから、私は嬉しくて笑いながらネックレスを軽く握り締めた。

「間違い？」（後書き）

今回は長くなってしまいました…。
話の区切りで話数を決めているので、どうもバラバラですね。

今回はノアちゃんの鈍さの話です。
シンくんにだけ抱きつくノアちゃんはやはり無自覚だったみたいです。
でもシンくんは話の内容が分かっているのでとても反応に困ってました。
しかし、桜華は意外にも冷静に話に加わってましたね。

次は屋内でのんびりとした話になりそうです。

「…まじですか」

シンに「お前はいつもいつも！」と怒られたが、素知らぬ振りでシンを置いて月影と桜華のそばに行った。

「ほら、早く来ないと置いてっちゃうよ」

「ったく…」

シンがぶつぶつ言いながらも私のそばに来たのを確認して、私は手の平を下に向けてもうお馴染みの力を使った。

［瞬間移動（テレポート）］

大都市の賑やかな雰囲気を名残惜しく思いながらも、私たちはその場から消えた。

ところ変わって着いた先の私の部屋。まずは皆でリビングに行くと、兄さんが眼鏡をかけてソファで本を読んでいた。私たちの足音に気が付くと本を閉じ、眼鏡を外してこっちに体を向けた。ちらっと本の題名（タイトル）を見てみたんだけど、『機器と応用の変化』…相変わらず難しそうな本を読んでいた。

「おかえり乃鴉。その子たちは？」

兄さんの呼びかけで視線を兄さんに戻し、少し道を空けて月影と桜華がよく見えるようにする。

「都市で仲良くなったの。月影と桜華だよ」

簡単に容姿の説明しとこうか。

月影は、茶色く腰まである長いと同じくらい澄んでいる茶色くて切れ長のクールな瞳。背も高いし、とても綺麗な女の子。
桜華は、橙色の髪の毛でちょっとくクセっ毛のショートで、瞳も橙色でとても純粋そう。背は低くて、しかもちょっと幼い顔だからなんか、妹みたいな感じで可愛い。

二人は兄さんに向かって軽くお辞儀をして、微笑んだ。

「乃鴉のお友達か。俺は乃鴉の兄の修一。なんと呼んでもらっても構わないよ」

兄さんも珍しく微笑んで二人を迎え入れた。やっぱり可愛い女の子に弱いのは昔から変わらないみたい。

「修一さん、言われたもの買ってきたっすよ」

「おお、これだよこれ。つまみもいいもの買ってきたな」

「修一さんの好きな物は昔から分かってるっすから」

「よくやったぞシン。今日は人数も多いし、夕飯は軽く済ませられるものにするか」

「俺も手伝うっす」

挨拶も終わり、シンと兄さんが報告の会話をしながら夜ご飯の準備をしだしたので、私は月影と桜華を連れて部屋へ戻る。

「私たちは手伝わなくていいんですの？」

部屋に入って女の子三人でくつろいでいると、月影が言ったので、私は「いいのいいの」と言ってあげた。

「兄さんがいるときは、私は手伝わなくてもいい決まりになってるから」

「いるときは？じゃあお兄さんとは一緒に住んでないの～？」

「うん。私たち、両親いないんだ」

そう言うと、二人は気まずそうに顔を見合わせた。でも私はそういうのに慣れていたから、笑って経緯を簡単に説明してあげた。

「気にしなくていいよ。私たちの両親は、私たちが小さいころに事故で死んじゃったんだって。その頃の私は物心つくかつかないかの頃だし、覚えてるのは兄さんだけなんだけどね。それで、私たちは母さんのお姉さんに引き取ってもらったの。叔母さんのとこは子供がほしいのに出来ない夫婦でね、子供の私たちを喜んで受け入れてくれた。だけど私は母さん達と過ごしたこの町も苗字も手放したくなかった。そうしたら、兄さんが私の分も叔母さん夫婦に恩返しとして苗字を受け継いで、一緒に暮らしてるから私は今ひとり暮らしなの」

一通り話し終わって二人を見ると、月影は神妙な顔になっていて、桜華にいたっては涙ぐんでいた。

「辛かったんだね～」

そう言って私に抱きつく桜華。そして月影は持っていた鞄をゴソゴソして、なにかを取り出した。

「先程は言う必要がないかと黙っていましたが、これを受け取っていただけますの」

そう言って渡されたのは、名刺だった。そこに書かれているのは「『來家（ライヤ）』　代表取締役秘書　月影」と書かれていた。

ちょっと待って…『來家』といえば色んな国を駆け抜けて、色んな商業に幅広く手を出す貿易会社だった気がする。この『來家』はもともと代々続く“ドゥルグン”一の貿易会社の通称みたいものなんだけど、古くから貿易に手を出していて今も結構な稼ぎみたい。もちろん、そこの経営者はとてもお金持ちの資産家で色んな国に別荘があるとかないとか…とにかく貴族みたいにお偉いさんなんだよ。しかもここには代表取締役秘書って書いてあるけど、ようは一番偉い人の秘書さん。見た感じとても若い月影が、そこで秘書として働いてるってこと？私は意外過ぎて、受け取った名刺と月影を交互に見た。

「私はそこに書いてある『來家』の一人娘ですわ」

「…まじですか」

未だに信じられない。だって、本当に偉い人にしか姿を見せないし、会おうとしないことで有名な『來家』が、目の前にいるんだもん。しかも、そんな人と桜華が友達？

そこまで考えて、思わず未だに私に抱きついて鼻をすすっている桜華を凝視した。

「えーと、聞きたいことはいっぱいあるけど、とりあえずなんでここにいるの？」

「そうですわね…あまり色んな人にしたいお話ではないので、私の方も簡単でよろしいですの？」

ええ、ぜひとも。現状把握のためにお願いします。

私はしばし放心状態のまま月影に頷き、心を落ち着かせるために抱きついている桜華の頭をなでなでする。月影は頬に手をあててこう切り出した。

「そうですわね…まず、私はあの家を出たくてこの町にいるんですの」

…おっと。なんか思ったより深い事情に足を踏み入れようとしているのかな？私は。

「…まじですか」（後書き）

今度は月影のちょっとした家庭事情です。
その間シンくんとお兄さんはお休みです。
けどノアちゃん、聞いたことに後悔しかけているようです。
まあ、完全に何かに巻き込まれるフラグですもんね。
なので、初めての厄介ごとに巻き込まれちゃってください。

「王妃候補」

月影は話をそう切り出して、深く溜息をついた。美人はどんな表情（カオ）でも様になるなー。未だに目の前に『來家』の人間がいるなんて信じられなくて、そんな現実逃避をしてみる。

「私は確かに『來家』の一人娘ですが、それと同時にこの“ドゥルグン”の王位第一継承者の王妃候補の一人でもありますの」

……はい？

またまた爆弾発言来ましたよ？もう一回ちょっと待って。この“ドゥルグン”を収めているのはもちろん国王。私は国王の名前を、というか皇室の人間の名前なんて誰一人知らないんだけどね。話を戻して、その国王は一夫多妻制で何人もの子供の中から選りすぐりの子供に数字を与えていて、一番王位継承者に近い子供が王位第一継承者。二番目に近いのは王位第二継承者って感じで順番に子供を並べているの。個人的な話、そもそも一夫多妻制が有り得ない話だよね。選ばれる子供だって可哀想。

それで話の続きなんだけど、代々の国王は優秀な女ならたとえ庶民でも妻にするような人たちで、自分の息子たちにも優秀な妻なら誰でもいいから娶れ、って感じで色んな国から優秀な女の人を集めて王妃候補っていうのを与えているの。もちろん、王妃になるにはその女の人の同意も必要。だから、滅多に政略結婚みたいな無理やり結婚させられることはないはずなんだけど…。

私も頭を整理したいから、話をまとめてみよう。

まず、月影は“ドゥルグン”一の貿易会社の一人娘で、一応肩書きは代表取締役秘書。さらには“ドゥルグン”の王位第一継承者の王妃候補の一人でもある。でも、控えめに見ても月影はその王妃候補

に納得がいってないように見える。私が分かるのはここまでだね。

「…王妃候補ですか」

私はもうなんと言っていいのか分からず、唖然としながらとりあえず敬語で対応してみた。

「その敬語はやめてくださいな。それに、私は今時古い政略結婚を受け入れるつもりはありませんわ」

そう言って月影は顔を歪め、頭を抱えだしてしまった。

「どうして？今の王子様たちはイケメンばっかりって聞くけど」

「私はそんな見かけや地位負けの中身の男なんて御免ですの」

ちょっとした冗談を言ったつもりが、割と本気で睨まれてしまった。でも、肝心の家を出た理由を聞いていないことを思い出した。

「でも、じゃあなんで家を出たの？確か王妃候補は断ることも出来たはずだよね」

「それは…」

いきなり言いよどむ月影。そこで、今まで私にくっついていた桜華が離れ、私に事情を説明してくれた。

「それはね～、月影のお父さんが「お前が結婚しないなら、変わりにお前の親友である桜華を推薦するぞ」って言ってきたらしいの～」

…ひどいこと言う親父だな。確かに、自分でも嫌な結婚を親友に丸投げなんて出来るわけがない。私は思わず顔を顰めてしまった。でも、そこでどうして桜華が話しに出てくるの？
私の疑問が顔に出てたのか、これも桜華が答えてくれた。

「わたしのお父さんがね、月影のお父さんの会社の社員で家族ぐるみでお付き合いがあるんだよ～。だから、一番巻き込んでも被害が少ない私が推薦されそうなの～」

「…ひどい親だね」

「全くですわ。母を幼い頃に亡くした私を男手で育ててくれたのには感謝していますの。でもそれとこれとは話が別過ぎですわ」

月影はまた大きく溜息をついた。でも、これで納得がいった。月影と桜華の仲が良いわけも、月影が未だに王位第一継承者の王妃候補の一人でもあることも。そりゃあ逃げ出したくもなるはずだ。でも、まだ分からないこともある。

「月影、何個か質問してもいい？もちろん答えたくないことには答えなくてもいいよ」

「構いませんわ。名刺を渡したのは乃鴉が始めてですし、ある程度のことには答えられると思いますわ」

「ありがとう」

私は月影にお礼を言って、姿勢を正して真剣に聞く体制を作った。

「まず一つ目。この町、“ランディム”にいるわけは？」

「それは少し違いますわね。私は元々“ルヴォルカ”の生まれと育ちなので、この都市にいるんですの。まあ、他の国に行かない理由の一つは桜華ですわ。彼女を残して自分だけ逃亡なんて出来ませんもの。それに、貿易で商業を生業としている『來家』からは、どこの国に逃げようとも見つかって連れ戻されるのがオチですわ。だから、この国で能力者（ネイチャ・フリクシヨンザス）の上位になるという名目で、この国でのみの自由を許されていますの」

「…自由なんて、ないんだね」

私は思ったことをふと漏らしてしまった。この言葉を聞いた瞬間、月影の顔に陰がさしたのをはっきりと見た。そんな月影のそばで、桜華が手を握って寄りかかっていた。本当に、小さい頃からお互いだけを見て育ってきたんだろうな。私とシンみたいに…。

「二つ目。いくら政略結婚とはいっても、そこまで拒む理由はなに？月影の性格なら、桜華を盾にされた時点で少しのマイナスがあってもＯＫしそうなものだけど」

「…少し、考える時間がほしいですわ」

ついに俯いてしまった月影に、私は頷いて答えを待つ。自分でも、深すぎる質問だと思う、でも、この月影の家庭事情を少しでも聞いてしまった以上、多少の厄介事に巻き込まれるのは覚悟しておいたほうがいいかもしれないから。それくらい、月影の事情は深くて狭い事情なの。きっとこれを知っているのも、私たち意外はごく一部の貴族か皇族の人しか知らないはず。
そう考えていると、月影のそばにいる桜華が口を開いた。

「国王の息子…王位第一継承者とは小さい頃からの仲なの～」

「え？」

「カーくんとわたしたちはね、小さい頃はいっぱい一緒に遊んでたの～。月影のお父さんは皇族御用達の、特別な品を扱う会社だったからよく子供同士で遊んでた～」

「……」

これもまた驚きの事実だ。王位第一継承者と幼馴染？それならなおさら断る理由が見つからない。何も知らない仲でもあるまいし、何が気に入らないんだろう。

「でもね、カーくんは…」

「桜華、もういいですわ。これより先は私が話しますの」

桜華の話を遮って、月影はその重たい口をゆっくりと開いた。

「王位第一継承者の名前はご存知ですの？」

私は首を横に振った。すると月影は呆れた顔をして私に言った。

「仮にもこの国に住んでいるのですから、長の名前くらい覚えたらどうですの？」

「だって、顔を見たことも無ければ興味ないし」

「そうですの…。まあいいですわ、王位第一継承者の名前はラ・カ

ウン王子。桜華が言ったように私達の幼馴染ですの。ですが、カウン王子は他に王妃候補がいて、その方はカウン王子の初恋だろうお方ですの。ですから、王妃候補の一人となって、早くカウン王子がその方と結ばれてしまえば私の役目は終えますから、わざわざ断らなくてもいいと思っているからですわ」

そう話す月影の顔は、清々したとでもいうような表情(カオ)なのに、私にはその顔がとても泣きそうに見えた。

「王妃候補」（後書き）

はい、月影のめっちゃ内部の家庭事情です。
なんだかすれ違い系の厄介事の臭いがプンプンします。
それに桜華も一枚噛んでいる気もしますね。
それにしても「カーくん」って…王位の敬意の欠片もありませんね。
しかもその内部事情に躊躇いなくずんずん進んでいくノアちゃん。
ここにシンくんがいたらマジで止めていますね、ストッパー役なので。
それでも、仲間が困っていることは放っておけない性格らしいノアちゃん。
それに巻き込まれていくのは、当然シンくんです。
ストッパーになれませんね、きっと。だってストップさせられないんですから。

「どうして」

「とりあえず、お話出来ることはこれまでですわね」

そう言って、これ以上話すことはしたくないような顔で私を見つめた。…まあ、これ以上は『來家』云々じゃなくて月影個人の事情も入りそうだし止めておこう。会って初日の人間の古傷を抉る趣味はないからね。

「ありがと」

私は月影に頷いた。その場は少し気まずい雰囲気が流れたが、それでも誰一人喋り出そうとはしなかった。

片や『來家』の一人娘で、王位第一継承者の幼馴染にして王妃候補の月影、片やその人物たちに一番近いところにいる桜華…少なくとも、そう簡単に体験出来る地位にいる人たちじゃないね。こんな人たちと知り合っちゃったけど、大丈夫かな？

あ、月影に一つ聞き忘れてた。

「ねえ、どうして私に名刺を渡して、しかも身の上話までしたの？」

「それは、今後乃鴉に何かあった時にこの名刺を使って欲しかったからですわ」

「…会った初日の人に？」

私は思わず訝しげな顔で月影を見つめた。

「ええ。あなたなら、この名刺を悪用したりすることはないと思い

ましたの。それに、樽の件でのお礼もまだしていませんしね」

「いいよ、あんなの。助けた内に入らないよ」

あんなことをしただけで普通名刺渡して身分明かす？私は何故か引け目を感じて慌てて顔の前で手を振った。

「私にとってはそうではありませんでしたので。それでは何か不満でも？」

……ようは月影の自己満足のため、ということを言いたいのか。それなら月影の自身の問題だから何も言えなくなるじゃないか。私は「うー」と唸って月影を見た。桜華はそんな私たちを見てくすくす笑っていた。

コンコン

「ノア、飯の準備が出来た」

気まずい雰囲気も取れ、しばらく三人で談笑しているとドアのノック音が聞こえ、私の返事も待たずにドアが開きエプロン姿のシンが入ってきた。

「はーい」

私たちはそれを合図に談笑を止め、シンを含めた四人でいい匂いのするリビングへと向かった。

「わあ、今日も美味しそー」

テーブルの上にどんと置かれた存在感ありまくりの大きなお鍋。その中は私の好きな白菜たっぷりのすき焼きだった。兄さんがいない時はシンと二人だけで夕飯を済ますから、今日は何だか賑やかで楽しいし嬉しい。

「お兄ちゃん特製の焼酎すき焼きだぞ」

「ショウチュウとスキヤキって何ですの？」

兄さんの言葉に、月影が首を傾げた。隣では桜華が苦笑いをしている。そうか…仮にも皇族に近い『來家』はこんな庶民的なもの食べたことないんだ。私は月影に卵の入った器を渡し、自分も手に持って溶き方を教えた。なんだかマーブルみたいに不器用な混ざり具合になってしまったが、初めてにしては興味津々の月影。

「これはどんな食べ物なんですの？」

「そうだな、鍋ものって知ってるか？」

シンの言葉にも、月影は首を傾げた。シンも兄さんも月影の事情知らないからしかたないか。私は苦笑いしながら月影に焼酎とすき焼きの説明を始めた。

「月影、いい？すき焼きっていうのは好みのお肉と野菜を醤油や出汁で味付けして軽く煮込んだものなんだよ。それで、それにこの卵をつけて食べるの。焼酎ってのはお酒の種類だよ」

「お酒…アルコールのことですわね？私アルコールはリキュールやワインなどしか飲んだことありませんの」

おお…見事に庶民には手の出せないものを飲んでるな。それもきっと最高級のお酒なんだろう。どんな味か興味あるから、今度月影に試飲させてもらおう。

「初めてのものばかりでとても興味ありますわ。早速いただきましょう」

みんな席につき、各々が鍋に箸をつけ始めた。今思ったけど、いくら『來家』に勤めてても桜華はすき焼きも焼酎も知ってたみたい。それでもお嬢様な暮らしをしてるんだと思うけど。

「…とても美味しいですわ。この甘さとしょっぱさの絶妙な加減に少量のアルコールの香りがそれらを包みまろやかな味に…」

「おーい、月影？戻ってきて？」

なんだかグルメリポートみたいなことをし始めた月影の前に手を翳して現実へと引き戻す。

「こんなにも美味しいものがあったなんて、知りませんでしたわ」

「お前、どんな生活してんだよ」

呆れたようなシンの何気ない一言に、月影は息を呑んで口を閉ざした。まあ、言いづらいよね。でも、私が見る限りそれは言いたくというより、言いたくてもどう言うべきか迷っている風に見えた。

「月影はね、『來家』の一人娘なんだって」

だから私は月影の変わりに兄さんとシンに言った。その瞬間月影が

何か言いたそうにこちらを振り向いたが、覚悟が出来たのか何拍かおいて自らさっき話したことを掻い摘んで話し始めた。

「まったく乃鴉ったら…今言われた通り、私は『來家』の一人娘であり王位第一継承者の王妃候補の一人ですわ」

男二人を見ると、見事なまでに固まっていた。そりゃそうだよ。私も最初聞いたとき反応に困ったもん。

「ノア…お前知ってたのか？」

危うく箸を落としそうになりながらも間一髪大丈夫だったシンが聞いてきた。

「まさか。私もさっき聞いて、二人を同じリアクションをとったばかりだよ」

「それにしても…とんでもない地位の人がいるな」

兄さんも珍しく動揺を隠せないみたいでそばにあった焼酎に口をつけて自分を落ち着けていた。

「ちなみに、桜華のお父さんはその『來家』に勤めてるから月影と仲いいんだって」

私はすき焼きのお肉をつつきながらなんでもないことのように話した。もちろん、二人はまた固まって二人そろって桜華を見るものだから桜華が苦笑いで引いていた。とりあえずみんなはまた鍋をつつきはじめ、この人数なのであっという間になくなってしまった。

「どうして」（後書き）

月影の情報がノアちゃんの周囲にどーんと大公開です。
それにしても、段々と月影のイメージが変わってきました。
もとから変な人役のつもりがとても変で面倒な人になりそうです。
まあ、とりあえず団欒が書けたので少し満足です。
また次も団欒になると思いますが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7823t/

私の隣で君は笑う

2011年10月9日02時59分発行